創作に集中するミナさん。さまざまな色を上手に組み合わせて、鮮やかな作品に仕上げていく。

アート展最終日の11月24日に行われたパペレッタ・カンパニー那須による人形劇。多くの家族連れで賑わった。

右から清野隆さん・ミナさん・邦子さん。ミナさんが描く緻密でカラフルな絵は、いつまで見ていても飽きない。

障害者×アート 01

昨年11月に節目となる第10回目の開催を迎えた「つながるひろがるアート展Nasu」。那須地域に住む障害のある作家約35人が市内外のカフェなど14施設に作品を展示した。本アート展の実行委員であり、ギャラリーバーンの代表である清野隆さんに障害者アートの魅力と今後の展望を聞いた。

この地域にもギャラリーを

深い茶色の木の外壁が特徴的な建物。扉を開けると天井が高い空間が広がり、ほのかなコーヒーの香りが出迎えてくれる。壁に掛けられた絵はとても色彩豊かで、全体を明るく引き立てている。ここギャラリーバーンでは、地域の作家の作品展や絵画教室、歌声広場などが日々催されている。

「この地域にも作品を展示できる場所が欲しかった」と15年前にオープンしたきっかけを振り返ったのは、自らも絵画や立体造形の創作に励む傍ら、ギャラリーの代表を務める清野隆さんだ。開設前は宇都宮や小山までわざわざ足を運んで作品を展示するなど、多くの苦労があったという。「みんな同じ悩みを抱えていたようで、今では地域のたくさんの作家が展示してくれる」と嬉しそうに話してくれた。展示だけでなく、絵画教室や歌声広場も非常に好評で、歌声広場は毎回70人もの高齢者が集う大盛況ぶりだという。

ギャラリーバーン
清野（せいの） 隆 さん

障害者アートの魅力を広める

10年以上前に那須のホテルで開かれた海外作家のアウトサイダーアート展※。障害者が創作した美しいアート作品が展示されていた。それを見ながらも頭に浮かんでいたのは、生まれつき障害を抱え、絵に没頭する娘ミナさんの姿。〝地域に根差した障害者アート展ができないか〟。漠然とした思いが彼の中に生まれた。

この地域で創作に励む障害者を探すため、彼が訪れたのは障害者支援施設〝マ・メゾン 光星〟。「そこで見た色彩豊かで自由な発想の絵に、心が奪われました」と当時を振り返り、「この絵を地域の人にも広めなければいけない」と想いをさらに強くしたのだという。

〝多くの人に作品として見てほしいので、暮らしの身近な場所に、きちんと額装して展示したい〟。そのためには、展示してくれる場所と額装する費用が必要だった。そこで、地域の企業から協賛金を募り、カフェやホテルなどに展示の協力を呼び掛けた。色んな人たちの支えを受けながら、今から10年前の11月に「つながるひろがるアート展Nasu」が産声をあげた。

※アウトサイダーアート
伝統的な芸術の教育を受けていない人が創作したアート。障害者アートなども含まれる。

多様性を受け入れるきっかけに

「毎年楽しみにしているよ」。昨年で10回目を迎え、恒例となったアート展では、そんな声をかけられるようになった。当初は障害者に対する差別的な意見を聞いて胸を痛めたこともあったが、最近はそんなこともめっきり減ったという。「障害者の作品と触れ合うことで、彼らを受け入れる素地ができたのかな」と話す彼の顔に自然と笑みがこぼれた。

障害を抱えて生きる困難さを、身近で感じてきた清野さん。「多くの人が色んなアートに触れ、世の中には多様な人や多様な価値観があると感じてほしい」。彼が目指すのは、差別されがちな障害者などが尊重され、多様性が認められる〝人に優しい社会〟だ。障害者と健常者を隔てる壁がないアートの世界。「我々が大人になるにつれて失った大切な何かを、彼らは持ち続けている。だから、その絵は人を明るく元気にしてくれる」と魅力を熱く語る清野さん。「作品に触れる機会をもっと増やしたい」と今後の抱負を語り、「多くの人に見てほしい」と期待を込める彼の目はとても輝いていた。

ミナさんの創作の様子を話してくれた
清野 邦子 さん

ミナにとって、アートはかけがえのないもの―――

ミナは、子どもの頃から絵を描くのが大好きで、現在の作風になったのは高校生くらいです。没頭すると、一人で黙々とペンを走らせ、何時間も経っていることもあります。その間は周りで誰かが付き添っていなくても問題はありません。

独立心が強いのも、そうやって一人で過ごす時間があるから。本当にアートに出会ってよかったです。

〈ギャラリーバーン〉
那須塩原市小結88-197
☎0287-64-2288　火曜定休（祝日営業）